

# 歴史の中で福音に生きる

丸 山 忠 孝

## 一、歴史と暴力

歴史は暴力です。人間を支配する乱暴な力、無法な力です。

多くの人間にとって、歴史は彼らを時間と空間という枠に閉じ込め、遠慮会釈も情容赦も無く、土足で踏みつけるようにして彼らの生涯に介入してくる暴力と写るのです。そして、神の摂理を信じているキリスト者といえども、歴史の中に神の意志を明らかに見ることは容易ではなく、またそれ故、歴史を暴力的と考えるてしまいがちです。

(1)歴史からの暴力―「生老病死」から国家的暴力まで

さて、歴史を暴力的とすることは、歴史がある時は人間に暴力的に、他の時は非暴力的に、勝手気儘に、差別的に働きかけることを言うものではありません。むしろ、一つの例外も無しに、人間の生命の始まりから

死に至るまでの人生の全局面において、人間を歴史的存在という制約、枠の中に押し込める暴力のことです。この意味において、人間は歴史の暴力的支配から一瞬たりとも自由になれないのです。

今から二千数百年の昔、お釈迦さんは人間という歴史的存在すべてに共通する四つの苦しみ、すなわち、「生老病死」を目のあたりにして悟りを開いたと言われます。そして、生きることの苦しみ、老いることの悩み、病むことの痛み、死への恐れ、これらはまさに「歴史からの暴力」のシンボルです。

ここで、世界の大多数の人間が意識的にしろ、無意識的にしろ抱いている歴史観に注目する必要があるかもしれません。これは、お釈迦さんの教えから、ギリシャ・ローマの哲学、儒教など東洋の思想、自然崇拜や汎神論の宗教、さらに下っては十八世紀の啓蒙時代以降の科学思想をはじめとする近代の諸思想までに共通する歴史観です。これを自然主義的歴史観と呼ぶことができます。なぜなら、「歴史を自然の中だけのことと理解する観方」であり、「人間の歴史を宇宙の歴史の一コマとか、生物の歴史（あるいは生物学という大きな本のほんの一章にすぎないとする観方」であるからです。今日では進化論のような科学的装いを纏ったり、エロロジー（生態学）のような自然崇拜の流行とも相まって広く世界に浸透している歴史観といえます。そして、この歴史観こそ「歴史は暴力的」とする観方を助長する一大原因なのです。

もちろん、自然主義的歴史観は聖書の歴史観でないのみならず、それに対立します。聖書は創造者である神と被造物である自然・人間との関係から歴史を観ます。そこでは超越的な神と有限である被造物とは明確に区別されています。これに対し、自然主義的歴史観は自然であれ人間であれ、また神々ですら、一つの大きな自然の中にすべて押し込み、その中で歴史を観るのです。そこでは、しばしば暴力的で、非人格的な力と見なされる運、不運、偶然であれ、それらの力が人格化された女神や神々であれ、結局人間と同じ世界の中に生きるものなのです。

しかし問題は、この自然主義的歴史観が「歴史からの暴力」、すなわち、歴史的存在である人間の問題に「説明」を加えることができて、真の「解決」を与えることができな点にあります。「生老病死」を、「それらが自然なこと、誰でもが経験すること、避けることができないこと」と説明できたとしても、その説明の後に諦め以外どのような解決が残るのでしょうか。結果的には、この歴史観は人間をして「歴史からの暴力」に慣れさせ、諦めを感じさせこそすれ、その解決とはなりません。

むしろ、自然主義的歴史観が「歴史からの暴力」をさらに際立たせ、歴史の暴力性を是認することに一役買っている、と言えないでしょうか。一例として人工的な妊娠中絶をあげることができましょう。今日どれほどの数の胎児の生命が闇に葬られているのでしょうか。近代の福音の弁証家シェーファー博士と世界的に著名な小児外科医クープ博士の共著『人類に何が起きているのか』は、その第一章「人類の中絶」において、恐るべき勢いで胎児、新生児、子供、老人などの弱者の生命の軽視が世界的に進んでいるとして、自然主義的で、弱肉強食の原理に立つ考えのもたらず危険を警告しています。ちなみに、人工中絶王国日本では「正確な数は明らかではないが、この三十年間に中絶された胎児は五千万人を越えていると予測されている。日本の総人口の半数にあたる胎児が中絶されたことになる」と言われます。しかも、自然主義の歴史観が支配的な日本では、人工中絶も自然の出来事とみなされやすく、深刻な道徳・社会問題とはなりにくいのです。

さらに、二十世紀は個人レベルを越えた国家的暴力の恐ろしさを経験しました。例えば、自然主義的歴史観を病的、悪魔的にまで発展させた著作にヒットラーの『我が闘争』（一九二五―六年）があります。ヒットラーはそこで弱肉強食、適者生存、種の保存という自然の法則を人間の歴史、国家のあり方に当てはめました。勝れた種族を保存するためには、劣った種族や種族を構成する個々の生物は犠牲となりうる、と主張しました。その結果、ナチス・ドイツの全体主義国家はドイツ民族の繁栄のため六百万のユダヤ人を虐殺す

るにいたりました。

もつと身近な例をあげるならば、この数年、アフリカ大陸を中心として、飢えのため多い時には一日約三万人（そのうち多数は弱い子供たち）が死んでいった事実があります。たしかに、旱魃や飢饉という自然原因はマス・コミでも強調されました。しかし、これらの自然原因の背後には、先進工業国の行く自然破壊、その結果としての天候の異変、軍事超大国の覇権争い、国際機関の致命的な対応の遅れ、飢えに苦しむ地域の国家体制や社会制度の問題などの人為的要因があったことも事実です。そしてテレビのブラウン管からこの悲惨さを見せつけられ、「これも自然のいたずら、しかたがないこと」と説明をきくうちに、この富める日本に住む私たちはいつしか良心の痛みすら感じなくなってしまうたのではないでしょうか。

歴史は暴力です。そして、自然主義的歴史観は「歴史からの暴力」の悲惨さは際立たせませんが、その解決は与えてくれません。

## (2) 歴史に対する悲観主義——キエルケゴールからオーウェルまで

二十世紀の人間がほとんど忘れかけた言葉の一つに「ユートピア」があります。十九世紀では現実性を伴った言葉でした。というのも、ユートピアは歴史に対する楽観主義の産物だからです。人間は過去の歴史を正確に認識することができ、現実の出来事を完全に支配することができ、その上、未来に起きるであろうことを確実に決定することができる、という自信が産み出した言葉だったのです。実に、十九世紀は楽観主義の時代でした。

しかし、その世紀の中期、キエルケゴールはすでに歴史認識の不確実性、歴史の偶然性も指摘して、歴史に対する悲観主義を打ち出していました。「歴史的認識の上に永遠の福祉を築くことは果たして可能である

うか」と副題が付けられた『哲学的断片』（一八四四年）という著作で彼は言います。

「現在のものについての知識は現在のものになんの必然性を与えない。未来のものの子知は未来のものになんの必然性を与えない。同様に過去のものもの知識も過去のものになんの必然性を与えはしないのである。……過去のものの確実性の根底には未来のものにあると同様な不確実性がある。」

すなわち、哲学という真理探求の観点からすれば、人間は歴史からなんら確かなものを得られないということです。

キエルケゴールの悲観主義は二十世紀に現実となりました。ユートピアの夢から一夜にして世界を冷たい現実に覚ましたのは、一九一四年に勃発した第一次世界大戦です。さらに、大戦に引き続き続いた社会不安、経済恐慌、革命とファシズムの嵐、そして第二次世界大戦……。恐るべき破壊力をもつ近代兵器が次から次へと実戦に投入され、戦死者推定は第一次大戦が八五〇万、第二次大戦が二千二百万人以上。そして、広島・長崎への原爆投下、ベトナム、アフガニスタン……。人類の悲惨さ、歴史の暴力性に人々は恐れおののいていたのです。

第二次世界大戦直後の一九四九年、歴史に対する悲観主義の募る中で、ジョージ・オーウェルは二十世紀末の世界を予見して『一九八四年』と題する作品を世に送りました。彼が描く一九八四年の世界は、オセアニア、ユーラシア、イースタシアと呼ばれる三つの全体主義政権が互いに対立し、恒久的に戦い合っています。主人公ウィンストンが住むオセアニアでは平和、自由、真理が抑圧され、人間の思想と行動のすべてが思想警察に統制されているという恐怖政治が施かれています。そこでは、「戦争」は「平和」、「無知」は「力」、「憎しみ」は「愛」、2 + 2 = 5、「白」は「黒」と教えられています。その独裁社会のピラミッド型構造についてオーウェルはこの様に描写します。

「ピラミッドの頂点には偉大な兄弟が立つ。偉大な兄弟は絶対に通ちを犯さず、且つ全能である。あらゆる成功、あらゆる幸福、あらゆる勝利、あらゆる科学発見、全知識、全叡知、全幸福、全美徳は彼のリーダーシップとインスピレーションから直接的に出たものと解される。」

つまるところ、この社会では「歴史に生きる」ことの意味は一切認められません。ここに、反ユートピア、反歴史の悲観主義の世界があります。

さて、オーウェルが描く極端な世界ほどでないにしろ、今日、歴史に対する悲観主義は旺盛です。全般的に過去に対する反省、現在に対する責任感、未来に対する期待感は薄らいでいます。十九世紀の世界が歴史を支配しようとしたことなどは「夢のまた夢」であつて、むしろ、今日では歴史の大きな流れに身を委ねようとする無気力感、さらに「歴史からの逃避」現象が広まっています。

### (3) 歴史からの逃避——「私の生まれた日は滅びうせよ」(ヨブ三・三)

歴史からの逃避といつてもいろいろな表現や形態も取ることができます。比較的軽い逃避現象なら、誰もが経験するところでは、日本の中学・高校生の半数以上が学校を中退することを真剣に考えたことがあると言われます。

もつと深刻になりますと、実現不可能な夢や現実離れした想像の世界に逃れ、あるいは、一瞬一瞬が提供する快樂や満足を求める殺那主義に没頭することになります。そして、最もラディカルな逃避行為は自分という歴史的存在そのものを破壊すること、自殺行為であります。

聖書が記す人物の中でもヨブほど「歴史の暴力性」の辛酸をなめた人物はまれです。富んでいた彼は、財産であつた牛、ろばを用人共々シェバ人の略奪により、羊と用人はカルデヤ人の襲撃により、さらに息

子や娘たちすべてを荒野からの大風により残らず失いました。そんな折でも、災難を「自然」のせいとはせず、神のみこころと結びつけて「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」と叫んだ義人ヨブではありました。しかし、さしもの彼でも、彼を慰めにやって来た三人の友人に対して、遂に口を開き呻き声をあげました。

「私の生まれた日は滅びうせよ。」

男の子胎に宿ったと言ったその夜も。

その日はやみになれ、

神もその日を顧みるな……。」（ヨブ三・三〜四）

こうして、ヨブは激しい口調で歴史の意味を神に問い掛けましたが、その生命を自ら断つことはしませんでした。むしろ、悪性の腫れもので全身を覆われ、灰の中でのたうちまわるヨブを見て「神をのろって死になさい」と自殺を勧めたのは彼の妻だったのです。

今日、悲観的時代の反映でしょうが、世界中で自殺者は増加の一端をたどっています。日本でも従来では考えられなかった中学生や小学生の自殺が多発しています。キリスト者といえども例外ではありません。私さほど長くはない信仰生活においても、親しい友人の娘、ある教会の会員、神学生、著名な神学校の前校長などの悲しいケースを数えることができます。私はこれらの兄弟・姉妹を裁く権限がありません。死を目前にした彼らの心中にどのような悲観や絶望が去来したのでしょうか。

しかし、一つのことばは確かです。それは、前代未聞と言えほどに、世紀末の人間が「歴史からの暴力」にさいなまれていくこと、そして、この時代に生きることば「歴史的存在の痛み」抜きにしては語ることができないことです。

(4) 歴史的存在の痛み——「生きることはキリスト、死ぬこともまた益です」(ピリピ一・二二)

ここで、いよいよキリスト者が「歴史の中で生きる」ことに言及する段階となりました。

今日、キリスト者には少くとも二つのことが要求されていると思います。

第一は、まず「歴史的存在の痛み」を自己の中で自覚し、次に隣人の「歴史的存在の痛み」を知り、そのために祈り、解決に向け努力するなどしてその痛みと自己同一をすることです。

マタイ福音書二五章が描く最後の審判の光景はキリスト者の生き方をこの点でチャレンジします。永遠の生命と永遠の滅びに定められた者をちょうど羊飼いが羊と山羊を分けるようにして分ける審判者キリストの姿がそこにあります。ここに二重の自己同一があります。第一は、キリストは「わたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たち」の「歴史的存在の痛み」を自分の痛みとしてしていることです。そして、第二は、キリスト者がそのような者の痛みを自分のものとしているか、という点です。そして審判者は祝福されたキリスト者に言います。

「わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気のとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。」(三五—三六節)

「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたがこれらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。」(四〇節)

審判に臨み、判定の規準として要求されることは「歴史的存在の痛み」を分ち合うことができるかにある、というのです。



ピリピ書一章二節は、「生きることはキリスト」と「死ぬこともまた益です」と対になっている二つのことばで構成されています。その前の二〇節も「生きるにしても、死ぬにしても」と対になっており、「私の身によってキリストのすばらしさが現れることである」と続き、使徒パウロと主キリストとの自己同一が主題です。すなわち、二十一節は、まさに生と死の間にある歴史的存在としての人間の痛みの脈絡で理解されるべきです。

キリスト者に要求される第二の点は、先述の自然主義的歴史観とその影響力から解放され、真にキリスト教的歴史観を確立することです。すなわち、歴史を単に自然の中で観たり、また、暴力的であると恐れ、諦めるだけではなく、歴史を自然を越えた神との関係で見ることです。

一九四九年、ケンブリッジ大学の歴史学教授H・バターフィールドは有名な『キリスト教と歴史』と題する著作を発表しました。第二次世界大戦の悲惨さを歴史学者としてつぶさに観察した著者は、「歴史は人類の普遍的罪をあばく」と題する章でこう言います。

「歴史家はある特定の人々の人格に対し道徳上の審判を下すという意味では彼らを裁くことはできない。しかし、『すべての人は罪人である』という意味においては彼らを裁くことができる。」

「私たちの間で今日流行してはいるが、歴史学の研究成果からは支持されない、いいかげんで未検証の人間論のおかげで、私たちは悲惨に悲惨を重ねてきてしまった。」

ここでいう「未検証の人間論」とは自然主義人間論のことです。バターフィールド教授は、宗教家とか神学者としてではなく歴史学者として、近代社会が内包する普遍的罪を指摘し、自然主義の歴史観・人間観を攻撃しました。「歴史の暴力」を自然のこととするのではなく、神に敵対する世界の、また罪に染まった人間が織り成す歴史の暴力と理解する必要を主張しました。

以上の二つの観点からすれば、「歴史的存在の痛み」を生きるキリスト者の出発点は、キリストの受肉であるといえます。それは、罪の支配する世界から人間を救い出すために、神は愛する御子をこの世に遣わした受肉（最初のクリスマス）こそが、「歴史の暴力性」に対する神の解答だったからです。

古代教会の神学者アタナシオスは『神のことばの受肉』と題する著作で言及します。

「不朽な神のことばは私たちの世界にきました。しかも、父なる神の愛を私たちに示そうとして訪問するため、自分を低くして来たのです。……キリストはこの世の人間の度を越えた悪を見、すべての人間が死の宣告の下に置かれているかを見ました。彼は人間を哀れみ、その弱さを憐み、父なる神のみ手の業である人間が減びないため、私たちの腐敗した状態に身を低め、私たちと変わらない肉体を進んで取ったのです。」

ちょうど受肉において神は人類の痛みと自己同一を行ったように、キリスト者も生きることです。二十世紀の殉教者ボンフェツファアは独裁者ヒットラーにアンチ・キリスト的、サタンの悪を見、獄中からヒットラー暗殺計画に加わり、その発覚をもって処刑されました。獄中からの彼の手紙の一節です。

「キリスト者であるということは、この世の生活において、神の苦難にあずかることである。」

## 二、歴史と意味

「国籍は天にある」とは言え、キリスト者も歴史に生きることの痛みを生身で経験し、歴史の暴力にもたあそばされる存在です。そのキリスト者にユニークなことがあるとすれば、少くとも歴史の意味を知ることができる点です。

(1)歴史の意味―「我は天地の創り主、全能の父なる神を信ず。」(使徒信条)  
キリスト者は神の摂理を信じます。すなわち、唯一の神が歴史の支配者であり、神の意志によってこの罪の世界も支配されている、との確信です。

グノーシス主義はキリスト教会がその歴史の最初の百年間に直面した最大の異端で、使徒パウロの書簡もこの教えを反駁しているといわれます。この異端は霊と肉、魂とからだ、霊的なものと物質的なものを極端に対立させる二元論に立っていました。人間に関しては、魂は神から生れたものであるが、肉体は物質を創った悪しき神(旧約聖書の創造神)の作品で、歴史と暴力の世界に棄て置かれる存在でした。当然、救いは魂が肉体の牢獄から解放され、霊的な神に帰ることを意味しました。グノーシス主義によれば、「歴史の中に生きる」ことの意味は、そこから解放されるという否定的意味しかありません。

古代社会は使徒信条をもってこの異端を退けたのですが、信条の冒頭で「我は天地の創り主、全能の父なる神を信ず」と、摂理に対する信仰を告白しました。

しかも、摂理とは神が機械的に世界を支配することではありません。また、ちょうど、猫が捕えた鼠を一気に殺すことはせず、頻死の鼠を逃しては捕え、なぶり殺しにするような冷酷な支配でもありません。摂理とは「父なる神」の、人格的な歴史支配なのです。

バターフィールド教授は「歴史における神」と題する、別の論文でキリスト教が直面する今日的課題が摂理に対する意識の回復にある、としました。

「摂理とは、リモート・コントロールの類ではなく生きた事実なのです。それは、生活のこまごましたことの中に、一瞬一瞬断え間なく、出来事一つ一つの中に明らかに働いているものです。摂理を意識することなくしては、宗教を真剣に問うことも、神と共に歩むことも、心からの祈りも、熱心な信仰も成り立

たないのです。」

しかし、人はここで問うでしょう。神の摂理があるにしても、それが全く分らない場合、神も歴史も敵対しているように見える逆境の場合はどうか。摂理があるなら、なぜこの世に悪が、罪が、苦難があるのか。詩篇三篇が、「みよ、悪者どもはこのようなものだ。彼らはいつまでも安らかで、富を増している」と叫んでいるように、神を敬う者がこの世で虐げられ、神を蔑にする者が栄えることがあるのだろうか。

これらの問に対する答えは簡単ではありません。気安め程度の答えならあります。

「愛である神は私たちに苦難を与えられはるはずがない。それはきつと私たちの罪のせいだ。」

「今、栄えている悪人もいつか苦しむことになる。今、苦しんでいる者はいつか栄えることになる。」

「神は悪や罪が蔓延<sup>はび</sup>ることを一時的に見逃している。」等々と。

しかし、歴史における苦難の意義や公平さの問題への解決があるとすれば、それは、私たちが歴史を、また歴史の暴力を、歴史における苦難をどう見るかではなく、摂理の神がそれらをどう見ておられるか、を知ることです。ここに一つの、新しい視点が登場します。C・K・バレットは『歴史と信仰』と題する書の中で言っています。

「イエスの十字架での死と三日目の復活とは、神が私たちに人生の意味を示したものである。また、神が歴史を理解するその仕方、歴史のパターンを私たちに明らかにしてくるものである。」

すなわち、キリストの十字架と復活を通してでしか「歴史の中で福音に生きる」キリスト者のあり方は理解されえないのです。

(2) 十字架と改心―「私はキリストとともに十字架につけられました。」(ガラテヤ二・二〇)

死は歴史が人間に加えることのできる最強の、そして最後の暴力です。自分の体重を支え切れずに、心臓が破裂して死ぬケースが多かったといわれる磔の刑、十字架での死ならなおさらです。父なる神はみ子イエスの十字架により歴史の問題を解決しようとされ、イエスも進んで十字架への道を選ばれました。「歴史の意味」を説明する鍵が隠されているはずで。

日本を代表する神学者北森嘉蔵氏はその『神の痛みの中の神学』において言います。

「痛みにおける神は、御自身の痛みをもつて我々人間の痛みを解決し給う神である。イエス・キリストは、御自身の傷をもつて我々人間の傷を癒し給う主である。」

十字架は、人間の救いのため、愛するみ子を犠牲としなければならなかった神の痛みのシンボルです。

「目には目を。歯には歯を。」とは律法の原則です。同時にそれは、「力」対「力」という暴力の原則でもあります。この原則に対してイエスは「汝の敵を愛せよ。」「右の頬を打たれたら左の頬を向けよ。」と愛の原則を打ち立て、歴史の暴力性を無力にされました。それは、味方だから愛し、敵だから憎むという愛憎関係と、そして打たれば打ち返すという暴力関係の制限なく広がる因果の鎖の最初の環を、敵を愛せよと言うことにより断ち切ってしまったからです。パウロも、キリストは十字架により「ご自分の肉において敵意を廃棄された」(エペソ二・十五)と言います。神に敵対する人間と神との間の敵意を廃棄し、両者を和解させるのです。

確かに、イエスは十字架で苦難を受けましたが、その結果私たちに苦難が降懸ることが廃止されたわけはありません。むしろ、十字架は私たちが苦しまなくなるためではなく、私たちの苦難がキリストの苦難と似るものとなるためのものでした。その上、十字架は苦難の廃止よりも偉大な影響を私たちに与えます。そ

れは、今、私たちを罪の力から解放し、将来、私たちを死の力から解放するでしょう。こうして、十字架はキリスト者の苦難がそのまま勝利となりうることを実証しました。十字架こそ、人間の歴史を惨めなものにする苦難や暴力を、神の摂理の枠の中で、私たちにとって理解されうるもの、受け入れうるもの、有意義なものにすることができます。ここに鍵があります。

パウロは「私はキリストとともに十字架につけられました」（ガラテヤ二・二〇）と言います。キリスト者は自分の十字架を背負うことにより、キリストの十字架を追体験します。歴史を、その暴力を十字架において理解し、十字架を通して解決し、摂理の神を崇めます。

(3) 復活と新生―「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。」（第二コリント五・一七）

死は歴史が人間に加えることのできる最終的暴力であるのなら、キリストの復活は歴史に対する最終的勝利です。ちやうど、歴史が私たちを時間と空間の中に閉じ込めるように、死の力はキリストを暗い墓の中に閉じ込めました。しかし、キリストは三日目に墓を破って復活したのです。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」（第一コリント十五・五五）です。

キリスト者によるキリストの復活の追体験が新生です。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者」（第二コリント五・一七）なのです。キリストの復活がそうであったように、キリストにある新しい生命も歴史に対する勝利です。「我は身体のみがえり、永遠の生命を信ず」と使徒信条にあるように、歴史に対する最終的勝利はキリスト者に約束されています。とは言え、そのキリスト者といえども、歴史の暴力や苦難を経験し、また、死にもします。そして、地上にある限り、歴史に対する完全な勝利

はないどころか、しばしば歴史はキリスト者を打ちのめします。しかし、一つだけ確実なことがあります。それは、最早歴史はキリスト者を完全に、最終的に打ち負かすことはないという事実です。

ヘンドリコフ・ベルコフが『キリストと諸権力』で指摘するように、キリストの復活は歴史の中に働く力という力を有限で、最終的には抑えうるものにしてしまったのです。「神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。」（コロサイ二・十五）それゆえキリスト者は確信します。

「死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主イエス・キリストにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」（ロマ八・三八、三九）

(4)存在と時間―「今は恵みの時、今は救いの日です。」（第二コリント六・二）

「歴史の中で福音に生きる」とは、二千年前に一度だけ起きたキリストの十字架と復活の事実を、キリスト者が改心と新生として追体験することです。しかし、ここで大切なことは、この追体験が私たちがキリスト者となった過去の一時点で終わったのではなく、「ここに」、「いま」も繰返されていなければならないということです。

「今は恵みの時、今は救いの日」（第二コリント六・二）と聖書は言います。神は今の時代に、今日の日、ここで私たちがキリスト者として生きることを求めています。これが歴史に生きるキリスト者の使命です。歴史に生きるこの意味もそこにあります。

フランクルの有名な『夜と霧』という作品は、ユダヤ人の精神医学者である著者がアウシュヴィツ強制収

容所で体験した日々の記録です。そこには、想像を絶する限界状況下での人間の赤裸々な姿が描かれています。なかでも印象深いのは、ある夜の停電の際、一日の強制労働と虐待に疲れ果てた囚人仲間に著者が語り掛ける光景です。

「私は終りになお、生命を意味で満たす多様な可能性について語った。私は私の仲間達に人間の生命は常に如何なる事情の下でも意味を持つこと、そしてこの存在の無限の意味はまた苦悩と死をも含むものであることについて語った。」

「そして最後に私はわれわれの犠牲について語った。……そして収容所に入れられた最初に、いわば天と一つの契約を結んだある仲間の話しをした。すなわち彼は天に、彼の苦悩と死が、その代りに彼の愛する人間から苦悩にみちた死を取り去ってくれるようにと願ったのである。この人間にとっては苦悩と死は無意味なのではなくて、犠牲として、最も強い意味にみちていたのである。意味なくして彼は苦しみうとは欲しなかった。同様に意味なくしてわれわれは苦しみうとは欲しないのである。この究極の意味をこの収容所バラックの生活に与え、また今の見込みない状況に与えることが、私の語ろうと努めたことであつた。」

### 三、おわりに——歴史と挑戦

これまで暴力、苦難、死などのテーマを追ってきましたので、何か消極的で暗いイメージとの印象を受けたことでしょうか。しかし、歴史の中に生きるキリスト者の生き方は消極的なものではなく、むしろ積極的な歴史に挑戦し、神の歴史支配の最終的勝利である終末に向つて、「神のことばとイエスのあかしとのゆえに」（黙示一・九）生きるものであることを強調して結語といたします。



まず、どれほどキリスト者が世界の片隅で、小さく、弱々しく存在しようとも、その存在そのものが歴史への挑戦であり、神の支配の証しであり、宣教です。藤尾正人著『胸が熱くなるような』というエッセー集に「あふれる」という一文があり、感銘を受けたことがあります。

「伝道とは、あふれることです。キリストを信ずる喜びがあふれ出ることです。この喜びがなくて伝道すれば、なんとカサカサした伝道となることでしょう。それは人をも自分をも益しません。」  
こう書き出された文章に続いて、喜び抜き、義務感だけの伝道の失敗談があり、著者はこう結びます。

「伝道とはあふれることです。あふれていけば存在そのものが伝道なのです。」  
さらに、一見弱々しく、従順で、温厚なキリスト者の生き方が、実は強靱で、しぶとく、したたかなものであることも忘れてはなりません。使徒パウロは紀元一世紀中頃のキリスト者の姿をこのように描きました。  
「私たちは人をだます者のように見えても真実であり、人に知られないようでも、よく知られ、死にせうでも、見よ、生きており、罰せられているようであっても、殺されず、悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。」  
(第二コリント六・八一十)

ちようど、それから一〇〇年ほど後、二世紀中期に『デイオグネトウスへの手紙』という著者不明の文書が現れました。地中海世界に広く浸透したキリスト教のしたたかな強さと、地中海のブルーにも似たキリスト者の澄んだ姿を描いた一文があります。

「キリスト者は自由に人をもてなすが、純潔はいつも保っている。彼らはすべての人を愛するのだが、すべての人から迫害されている。彼らは貧しいのだが、すべての人を豊かにしている。……一言でいえば、彼らがこの地にあるということは、ちようど、魂が体の中にあるようなものだ。」

キリスト教は組織的に迫害され、教会も弱少であり、キリスト者は「全人類の敵」と言われていた時代に、キリスト者は世界の「魂的存在」、中枢の意味を持つ、見習うべき生き方と自覚していたことは驚きです。しかも、彼らは世界と没交渉であったのでも、社会から逃避したのでもなく、隣人と社会と関わりを持つ中で、世界と歴史の中枢に位置する存在、世界の魂と自分たちを理解したのです。

とは言え、歴史の暴力に対してキリスト者は弱いように、意図的な迫害の対象とされたキリスト者は、無抵抗であるだけに、助けがたい程の弱さを露呈します。しかし、そこでも、「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」（第一コリント一・二五）と確信するキリスト者の強靱さが隠されています。使徒行伝はしばしば迫害に直面しつつ宣教を行うキリスト者の姿を描いています。そのような光景の一つに、サンヘドリンが使徒たちをむち打ちで処罰し、宣教を禁じたことがありました。しかし、

「そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。そして、毎日、宮や家々で教え、イエスがキリストであることを宣べ伝え続けた。」（五

・四一、四二）

「はずかしめられる者とされた」のではないのです。「はずかしめられるに値する者とされた」ことを喜んだのです。すなわち、迫害を受けなくてもよいのに受けたのではなく、受けるべきことを受けてようやくキリストの名にふさわしい者になった、というのです。そのキリストこそ、恥と愚かさのシンボルである十字架で死んだ方でした。

そして、最後に、キリスト者の歴史への挑戦を可能にさせる最終的根拠は終末の信仰です。「主よ、来てください。」（第一コリント十六・二一）というキリスト再臨を待望する祈りです。

キリスト者はこの世界が、神の支配に敵対する罪と悪の支配でもあることを知っています。歴史の暴力も

知っています。これらの暴力、罪、悪の力の支配に対抗するように「地の塩」、「世の光」として召されたキリスト者がいかに無力であるかを知っています。それゆえ、キリストの再臨と厳正な神の審判をかえって祈るのです。

もちろん、キリスト者も最後の審判の場に立たされましょう。「歴史の中で生きる」ことをキリスト者も神の臨在の前で清算しなければなりません。使徒ペテロの教えもこの点を指摘します。

「愛する人たち。このようなことを待ち望んでいるあなたがたですから、しみも傷もない者として、平安をもって御前に出られるように励みなさい。」（第二ペテロ三・十四）

しかし、最後の審判と新しい天と新しい地の到来は、一方的な、決定的な歴史の問題に対する神の解答です。歴史の暴力、歴史的存在の痛みに対する恵み深い神の解決です。次の黙示的光景、新しいエルサレムの光景がこの点を象徴的に示します。

「見よ。神の幕屋が人とともにある。……神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっきりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」（黙示二一・三、四）

（本稿は、一九八五年三月四〜九日、国立赤城青年の家を会場として開かれたキリスト者学生会、全国集会の主題講演として発表したものを、紙面の都合上、最後部を縮少して掲載したものである。）